

---

# でばんだ！お父さん フォーラム2007

～ 会社の人から、社会の人へ ～

---



## 「でばんだ！お父さんフォーラム2007年」 開催記録

主催：フォーラム2007実行委員会

## ■開催趣旨

2007年問題の当事者である団塊世代は、元気な入間のまちづくり活動の有望な担い手です。まだまだエネルギーあふれる人たちが、自分たちの経験、スキル、ネットワークを活かして、入間の街で大いに活躍してもらいたいと考えています。

入間市では、この問題について取組む施策の枠組を検討しているところです。そして、まちづくりサポートネット元気な入間も、市民のまちづくり活動を応援する立場から、市と協働して団塊世代が元気な入間のまちづくりへ参加してもらおうきっかけづくりに取組む考えです。

その最初の取組みとして、標記のフォーラムを来年2月に開催します。このフォーラムを契機に来年度から団塊世代が地元の入間で活躍する機会や場面を広げていく目論見です。

入間市内のさまざまな分野で活躍されている諸団体にとっても、団塊世代の中から活動の担い手が現れること、活動に対する応援者が増えること、新たな活動が起きることは、重要な関心事とであり、共通する重要な課題だと考えます。

そこで、2月のフォーラム開催にあたり、社団法人入間青年会議所のご協力をお願いし、このフォーラムを成功させて、元気な入間のまちづくりの推進力をともに創り出したいと考えます。

## ■実施体制

### 【主催】

フォーラム2007実行委員会

### 【共催】

入間市

特定非営利活動法人埼玉ツーリズム協議会

### 【フォーラム2007実行委員会の構成団体及び個人】

アポポ商店街、

入間川ピオトープネットワーク研究会、

入間市文化創造ネットワーク、

(社)入間青年会議所、

入間市、

NPO法人加治丘陵山林管理グループ、

NPO法人子育て支援センターあいくる、

NPO法人埼玉ツーリズム協議会、

地域ふれあい通貨元気運営委員会、

関 俊三

まちづくりサポートネット元気な入間 (50音順)

■プログラム内容

13:30◆開会 司会 NPO 法人埼玉ツーリズム協議会副代表理事／実行委員事務局  
藤木 照治

13:35◆「入間市のまちづくりと市民活動」 木下 博入間市長

13:50◆「会社の人から、社会の人へ」 大妻女子大学家政学部ライフデザイン学科助教授  
/ NPO 法人南アルプス山の学校校長 宮田 安彦氏

14:30◆身近な市民活動実践者の事例紹介  
環境保全活動や文化活動、子育て活動、趣味を活かした活動など元気で楽しく活動している方々をご紹介します。

15:20～15:30◆休憩

15:30◆市役所より今後の取り組み説明

15:45◆各市民活動団体によるアピールタイム

16:30◆閉会挨拶 まちづくりサポートネット元気な入間副会長／実行委員長 犬塚裕雅

テーマ 入間市のまちづくりと市民活動  
木下 博 入間市長

皆さん、こんにちは。ご紹介をいただきました、市長の木下でございます。

今日は、2007年問題の一つの方向性といいたいでしょうか、そうした議論を企画をしていただいた『まちサポネット元気な入間』の皆様方に、まず厚く御礼を申し上げたいという風に思っております。

拝見をいたしますと、2007年問題というよりも2017年問題ぐらいのような感じがするわけございまして、もっともといわゆる団塊の世代と言われるような方が大勢ご出席かなと思ったんですけども、お若い方々のご出席でありまして、これまた大変嬉しいなど。今から、そうしたことについて皆様方がサポートして行こうというようなお気持ちで、この会にご参加をいただけたのかなと、大変嬉しく思っているところ

でございます。先ほどのお話のとおり、今日はたいへん盛り沢山の中身で時間がどれだけ有っても足りないというような感じがしておるわけでございますけれども



も、ぜひ限られた時間ではありますけれども有意義にお過ごしをいただければありがたいと、そんな風に思っております。

それから今日は、大妻女子大学の宮田先生がお出でをいただきまして、いわゆる会社を離れていよいよ社会の方でどうぞ活躍をいただけるのかという、「会社の人から、社会の人へ」というようなテーマでのお話も大変興味深いなという風に思っております。私の方は、相変わらずまちづくりの諸問題、そしてまた市民の皆さんの活動、こういったことについて2時までの25分間で、お話をさせていただければと思っております。

私が街中に出まして、いろいろなお話をしますと、多くの方が「市長、入間市はよもや夕張のようなことはないんでしょね。」と、まあこういうご心配の声をお聞きをいたします。「決してその心配はございません。」と、はっきり申し上げているのではございますけれども、今後の動き具合によっては、夕張が他山の石に成りかねない、非常に我々としても緊張感を持ったまちづくりが求められているという風に思っております。

ただ、二つだけ言えることは、地方自治体の財政状況というものを判断する材料と言いましょか良い条件として、交付税の不交付という問題があります。国から地方に対して、まあ言うならば親が子供に仕送りをすると、まだ自立してないからしばらく仕送り続けようというのが交付税です。ところが入間市は、平成18年度からこの交付税が打ち切りになりました。これを意味するところは、入間はもう自立した財政、そして行政が行われている。従ってもう国からは応援することは無いよと、まあある意味においては、国の健全財政団体としてのお墨付きをいただいたということが一つ言い得るわけがございます。しかしながら、これは決して喜ぶべき状況ではございませんで、今まで数十億と国から来た支援金が来なくなるわけでありますから、大変財政運営は厳しくなる、しかし市の財政としては健全であると。埼玉県40市在るわけでございますけれども、まだその不交付団体になっているところは9市前後でございますから、非常に財政的には国のほうで認めていただいていることであるということ。

それからいま一つ問題は、次世代に対してどんな負担を残しているのか。皆さんが多く心配されることは、これから少子高齢社会を迎えて、あまりに大きな借金ももし次世代に引き継がれたならば、その人たちは大変ではないかと、いろいろご心配をされる方々もおります。これも先日ある新聞に発表になりましたけれども、2005年度の決算統計数字で住民一人当たりの将来負担額、これを発表しております。これは県の方がしっかり調査をして出した数字でありますけれども、一番多いのは大利根町というところでありまして、これが住民一人当たり約52万円弱という将来負担額を抱えている。これは埼玉県で最大です。平均が29万9千円位ですから、約倍近い負担を残していくということになります。入間市は、約21万6千円ということでありまして、40市在るんですけど35番目位の低さにいるということ、これは低ければ



低いほど将来負担を軽くしているということになるわけでございますので、その点はやはり財政の健全性を示す一つの数字であるという風に思っております。

そして、入間においては例えば、ここの脇を通っております富士見通り線。これは都市計画の16メートルの道路。それから久保稲荷線という藤沢駅まで通ずる道路。これも51年間ですよ、51年間掛かってやっと今年全面開通を迎えたということでもあります。それから各種の区画整理事業、よく公共事業はどうのこうの批判を受けますけれども、安心安全のまちを維持するためにはやはり都市基盤というものがしっかりしていなかったら、私は安心安全は確保できない、救急車も満足に入れないような状況を放置しておいて良いはずがないというような信念で、区画整理事業はもう13箇所進めてまいりまして、その中間では、金が無いのにそんなに事業を進めて大丈夫か、縮小すべきだ、凍結すべきだ、こういう意見も沢山いただきました。しかし私は、これから少子高齢を迎えて次世代の人たちには再びこういったまちづくりに力を注ぐ余力はなくなるだろうと、したがって今できることは今やっつけていかなければならないというようなことで、事業に着手させていただいて、現在はもうだいたい11箇所がほぼ完成若しくは完成に近づいている。あと大きなのは、この付近の扇台の土地区画整理事業というものと、それから入間市駅北口の区画整理事業の、この二つを残すのみとなりました。決してお金を貯め込んで、何もやらないで現在まで来たということではなくて、健康福祉センター、それから加治丘陵の公有地化、やるべきことはやる中で健全な財政、しかも次世代へもそんな莫大な借金を残していないということは、市民の皆さんの適切なお指導によるものと、深く感謝も申し上げ、また我々もさらに努力をしなければいけないことかなという風に思っているところでございます。



話は変わりますが、けれども、どうも最近国会の方では、明解国語辞典を大臣に送らないと心配であるというような問題やら、片方は片方で不登校を起こして授業に参加しないというような状況がございまして、いったいどうなっているのかなと。こんな姿を子供

たちに見せて、お前らしっかりせいと言ったって、子供はなかなか従わないんじゃないかというような状況が続いています。

そして、これも話を変えるんですけれども、先ほど夕張という話が出ました。大変です今夕張は、もうほとんどの負担がアッパー・最高の部分で市民に協力をいただかなかつたらまちが存続しない。全国から多くの応援が来ている。ところが新聞に書かれておりましたけれども、もう結構ですと、これ以上何も送らないでくださいと、それを仕分けするだけでも大変な人がいる。そうでなくても職員辞めちゃうのに、とても処理できないからもう受付は中止しましたなどという新聞記事もございました。それからかつて中越大地震、小千谷市というところの助役が来まして講演をお聴きした時に一番困難を極めているのは全国から送られる救援物資だと、こういうお話も聞きました。もう千差万別いろいろなものが詰められた品物が届いてくると、これを仕分けするだけでも他の仕事ができない。したがって、小千谷でももうお止めくださいということで、断腸の思いだけでもお断りの PR をしたという風に聞いております。日本人で本当に心の暖かい人たちなんだなと思うと同時に、相手の思惑というのを考えて、ただ自分がこう思ったから是非こうしてあげれば相手も喜ぶということをやっていただけでしょうけれども、必ずしもそれがそのとおりに相手側には伝わらないという部分もあります。

なぜ私はこういう話をしているかといいますと、団塊の世代と大体昭和22年ごろでしょうか、昭和22・23・24年、こうした年代の人たちを称して団塊の世代と呼んでいるんですけれども、おそらくその方々、そこに該当している方々はもしかしたらあまり団塊の世代・団塊の世代と俺たちのことと言うなど、俺たち何も SOS を発しているわけではないぞと、あんまり親切の押し売りするなというようなことを思う方も居るかもしれません。そのくらいですね、この団塊の世代といわれる皆さんはしたたかです。あの厳しい戦後に生まれて、そしてそれ行けドンの時代を必死に生きて、そしてここで定年を迎えられた。それぞれの皆さんがしっかりと一本心に芯を通した人たちであろうという風に思っております。したがって、今われわれが考えるべきは、今日先生のお話にありますけれども、せっかく良い力を持っているのだから、まずそれを活かしていただく。それは会社であれ社会であれ、どちらでも良いと思うんです。問題は、やはり社会の、しかもボランティア的な要素の、そういった活動に対して目を開いて、これから協力をいただけないか。このことが団塊の世代と呼んで大変失礼な言い方ですけれども、多くの集団の中の皆さんにはお願いをすべきことなのかなという風にも思っております。

したがって、人間市では今そういった方々を対象にしてアンケート調査を実施をいたしております。どんなことを求めているのか、またどんなことに参加をしたいのか。そういったことも含めて今、調査中でございます。したがって、それらの結果を受けて行政側としてもしかるべき対応はしてまいりたいという風に思っております。既に埼玉県

では、支援センターというものを2千万ほどかけて設立をすると、そこにいろいろなご相談を受けるポジションを設けるというように言うておるようでございますが、市においてもそうしたアンケートの結果・ニーズによっては、そういった窓口を開設をし、多くの方が自分の思うような形でそうした活動に参加できるような道を開いていければなあという風に思っておるところでもございます。それとまた先ほど、その世代は頑張り屋だと、したたかだということを申し上げた。その反面、そういう方々はあまり人との関係というのは苦手、どちらかといえば自分の思ったことをただひたすらやっていくというような方々も多いはずでございますから、そうした方々の心を故里の方へ向けていただく、そういった仕組みもこれから我々は考えていかなければいけないのかなという風に思っております。

今日は、NPO 法人等を初めとして、市内でボランティア活動・NPO 活動等を展開している皆様の事例発表等もごさいます。この一つ一つの活動を拝見をいたしますと、



正に行政主導でこういうことをやってよということではなくて、自らの意思で自らがやれる方法を自分たちで探し出して、そして今一生懸命活動されている方がこの入間には圧倒的に多いということでございます。実はこれが、この入間市の活力源でありまして、やはりこれからは正に地方自治、自主・自立こういうことが言われている時代でありますから、何でもかんでも行政あれやれこれやれじゃなくて、行政はどんどんどんどんスリム化しろよと、その代わりやれるべきことは我々もやるよというようなことが、私は真の地方自治ではないのかなと、そこから民主主義という政治スタイルも出来上がっていくのかなあという風に思っております。

私はこここのところずっと言い続けて、また皆さんに問い続けておりますけれども、「日本は社会主義国家ですか、民主主義国家ですか」ということを聞きます。何を今更、日本は社会主義国家であるはずがないよ。実は今から十数年前バブルの崩壊する以前、正に日本は社会主義国家だったんですよ。全てが規制を加え、計画経済を推進をして、金

融機関は守りましょう、流通業界・小売業界何でもかんでもそこに規制・規制・規制という網を張って、そして福祉についても、当時我々はまだ若い時代でしたけれども、美濃部さんが松下幸之助さんにまで都バスの無料券を配布をしたと、というようなことで象徴されるばら撒き福祉ということも言われました。その姿が、正にこれは社会主義国家、国家管理によって国民がコントロールされていた。また、地方自治体も国の思惑によって動かざるを得なかった。こういう社会でありました。

ですから、今ここで色々な規制も緩和され、自由競争の時代に入って、正に今日本が民主主義の洗礼を受け始めていると、そこにこの団塊の世代・2007年問題も合わせて発生してきた。と言うのは、私は地方自治をみんなで作りに上げられるかどうか、その岐路に立っているのではないかという風に思っております。よく地方自治は民主主義の学校ということが言われております。地方自治がしっかり確立をしていけば、必然的に民主主義政治というのは、うまく機能する。しかし、そこに欠けたところがあると、民主主義というのは失敗をするという風に言われているわけでありまして、今私は日本の民主主義というのはほんとにその本質を問われている時代に来たなという風に思っております。

そういった意味ではこの入間市は、もう既に相当以前から市民活動というのはたいへん活発に行われているまちでありまして、他市からも入間の市民活動を見ていると実におおらかに活動をしている。行政とその活動の壁が非常に低い。他の自治体で何か行政に相談をしても、色々な問題が山積をして、なかなか一歩前進できない。かつて入間市もそういう姿がありました。しかし、ここ10年くらいはほんとに多くの皆さんが、お互いにその壁を壊して、そして正に行政との協働のまちづくりが今各所で展開をされているということは、本当に嬉しいと思っております。そこに正に、団塊の世代といわれる性根の座った皆さんが加わっていただけるならば、鬼に金棒という感じもするわけでありまして、そうした意味において私たちのこのまちづくりへの有力なサポーター、そういう形でお迎えをできたら良いのではないのかなという風にも思っております。

総論的なお話だけでたいへん恐縮ですけれども、私はこの入間の取り組みの姿勢というものが、多くの自治体に良い意味でのインパクトを与えることを願い、そしてまた我々自身がそうしたことを頑張ることによって、多くの市民の皆さんが入間市に住んでよかった、これからも住み続けようというお気持ちを持っていただけるのかなとも思っております。これから具体的問題について色々とお話があるかと思しますので、ぜひお聞き取りをいただき、また色々な議論を交わすことによってより良い方向性が示されればたいへんありがたいという風に思います。

なお、入間市では今年、向こう10年間の第5次総合振興計画というものを定めました。この計画によって、これからの10年間のまちづくりを行っていきます。それと同

時に、これは大事なんですけれども、行財政改革、行政は「やれやれ、やれやれ」と言っていて何もやらないじゃないか、そういうご批判もあります。それに答えて、例えば職員はこういう形で減らしてまいります。それからまた、支出についても、削減できるところは削減してまいります。こういう行財政改革プランというものも、発表しておりますけれども、それもその向こう10年間の計画の中で、着実に取り入れつつまちづくりをしていきたいと。で、なお且つ、健全な財政の自治体であれば、これは市民の皆さんが安心して暮らしをいただけるのではないのかなあという風に思っております。

それでは、ちょうど時間も参りましたから、お話を終わらせていただきますが、最後に子供たちの問題ですけれども、やはりまだまだ不安な状況がございます。したがって、今多くの市民の皆さんが、自発的に防犯パトロール等に従事をしていただいて、子供たちの安全を保っていただいております。これもまた力強いボランティア活動の一つでありますけれども、こういったことも含めて子供たちを地域の眼全体で見、そして安心して子供たちが成長できるような社会づくりに一役買っていただきますことを、心からお願いを申し上げます。

それでは、本日のフォーラムが成功裏に終了できますことを、心からお祈りをいたしまして、一言ご挨拶といたします。たいへんありがとうございます。

= 基 調 講 演 =

テーマ 会社の人から、社会の人へ  
講 演 大妻女子大学家政学部ライフデザイン学科助教授  
NPO 法人南アルプス山の学校校長  
宮 田 安 彦 先 生

初めまして皆様、大妻女子大学から参りました宮田と申します。よろしくお願いいたします。

私は、大妻女子大学の家政学部のライフデザイン学科という聞き慣れない学科で、研究と教育をやっているものでございます。先程、紹介がありましたように、生き方に関する研究をやっているところと、簡単に思っていて結構だと思います。その中で、私に関心があるものですね、私自身かつて企業で働いておりましたので、サラリーマンの生き方というのに特に関心を持ってこれまで活動をしてまいりました。今日はその研究の成果というわけではございませんけれども、やってきたことの一端をご紹介できればいいかなという風に思っています。

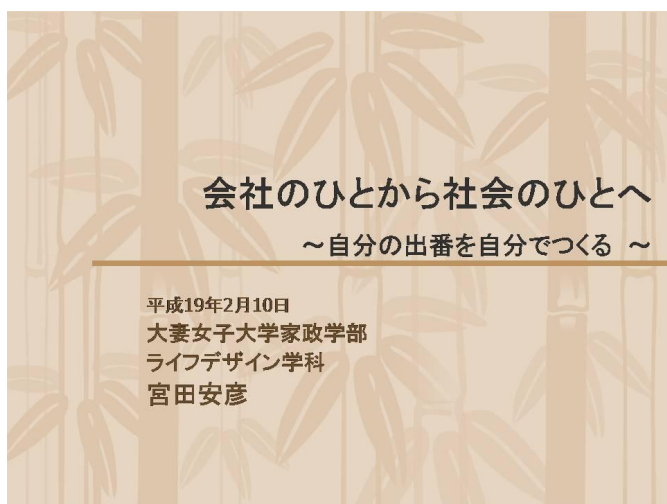
そういう経緯がありますもので、このタイトルにありますように「会社の人」というときには、都心部で働くようなサラリーマンのことをイメージしていると考えていただけたらと思います。で、主に団塊の世代を中心とする男性・ホワイトカラーサラリーマンということを中心に考えておりますけれども、先程藤木さんの方からもお話があったように、これ女性に関して当てはまらないということでもないだろうと、企業でずうっと働いていらっしゃった女性にも当てはまるということですので、そういうのを包括的な意味を含めまして、今日はここには団塊の世代の方がいらっしゃるという風に考えながらお話をさせていただきたいと思っております。勿論、団塊の前の世代の方もいらっしゃるというのは分かるんですけども、そ



の方も今から地域にどうやって係わっていこうかというときの参考になるのかなという風に思っております。

それで、与えられた時間は40分ございまして、私実は講義は90分ですので、90分の感覚は良く分かるんですけども40分ってどのくらいのものかと、実はあまり感覚が無くてですね、ちょっと詰め込み的な準備をしてしまったかもしれませんので、若干早口となることをお許しください。それと、その関係もありましてですね、お配りしたレジュメの順序を、話の順序を変えさせていただいております。こんな感じで山の学校の活動の紹介というのは後ろへ回させていただいて、時間の調整に使わせていただきたいなという風に思っております。

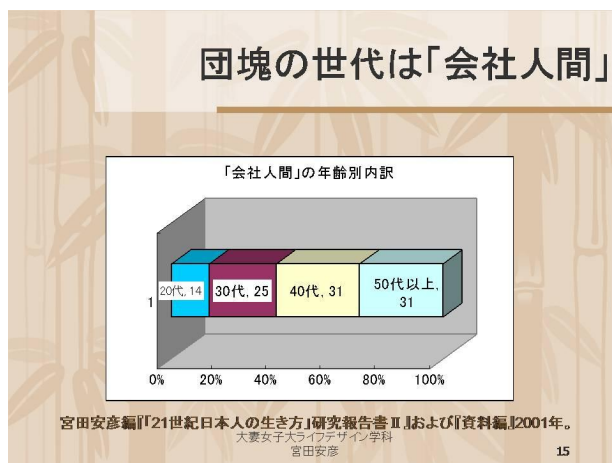
それでは早速、中身に入らせていただきたいと思いますけれども、団塊の世代の不安というところを取っ掛かりにしてお話をしたいと思います。まず、これを一覧いただきまして、これは若干古い調査アンケートの結果なんですけど、退職後の不安度はどのくらいだというようなことを、団塊の世代を中心にそれ以前とその後の世代に対して聞いたものでございます。そうするとですね、これは明らかに目立って団塊世代の退職後の不安というのが他よりも強いということが出てきました。これをまず頭の中に入れていただきたいと思います。



次ですね、これは皆さんへの問いかけになるのかと思うんですけども、団塊の世代というのが動くと世の中が動きます。特に消費の方が動きますので、段階の世代向けの色々な催しですとか、ここでは雑誌の出版というのが相次いでいると思うんですが、そのうちの一つを固有名詞は忘れてください、消さなかったの。どんなものが特集として載っているかとい

うイメージだけを頭に入れていただきたいと思いますけれども、お金の話、趣味の話、旅行の話ということが続いているというのがよく分かると思いますし、他の雑誌も多かれ少なかれこんな分野をカバーしているんじゃないかと思います。他の色々なものを見てみますと、蕎麦打ちセットが2~3年前から急に売れ始めているというのが皆さんにもご承知かと思いますが、陶芸教室も急に盛んになり始めたとか、そんな情報もいただいておりますが、総括して言いますと個人の老後の楽しみを求める方向に関する動きというのが、最近目立ったものであるという風に言えるのではないかと思うんですが、問いかけたいことは、本当にこれで老後の生活というのが十分なものになるんでしょうかという

ことなんです。何か足りないのではないかという風に、私は思うわけでございます。で、この足りないものは何かということ考えるということで、スタートをさせていただきたいと思います。それで団塊の世代ということは、年代別に区切った言い方なんです。その特性をもう一回復習をしてないといけないと、いうことだと思んですが、一言で言いますと「会社人間」という風なですね特徴ある名前を与えられた世代であると、いうことが言えると思います。因みに団塊の世代より前は、会社人間というよりも「企業



戦士」という名前が与えられたという風に、私の方では理解しております。では、この「会社人間」とは一体何だったかということなんですが、色々な定義がございます。例えば雇用問題研究会というのがありまして、そこが定義するのがですね、かなり具体的な行動を言っているんですが、家でも会社の仕事をするか？まあ、チェックシートのようなものですね。会社の

ためなら自分の生活を犠牲にするのも仕方がないと思えるかどうか。それから単身赴任することには疑問を持たないか。等々の行動様式を内面化した勤労者という定義がございます。これをもう少し難しく組織心理学から言うとですね、組織に対する愛着心や忠誠心、もっと専門用語で言うと、組織コミットメントを強く持った人と、ということになります。で、ほんとにそういう人だったかどうかというのが一つの例としては、ごく最近の日経新聞に出てたので皆さんご覧になったと思うのですが、自分自身を会社人間だったと思うかどうかというので、5割・半数の人がそうだったと答えています。で、さっき団塊という言葉がもしかして嫌がられているのではないかというお話がありましたけれども、もっと会社人間を嫌がる人も多いので、これは自己評価ですから会社人間と思いたくない方もここに入ってますから、その方を第三者が見て会社人間と思うという方に入れれば、もう少しこの左側は高くなるはずですね。実際に40代以下の人間が団塊の世代を見たときに、ほとんどが会社人間だという風に括っておりますので、他人の目を借りればもう会社人間と言うしかないという風に理解せざるを得ないんじゃないかと思います。で、先程ありましたように、単身赴任する人がいるのかということなんですけれども、転勤の命令を家族のために回避する回答率、これ私自身が以前アンケートを取ってですね、先に会社人間的な人か会社に反目する人かというのを分類してから、この質問をした結果ですね、これ真ん中にあるのが会社人間じゃない方ですね。それは拒否するというのが3割5分いるんですが、会社人間は左側です。拒否すると言った人は1割には満たなかったということで、先程の定義は実証されるんじゃないかという風に思います。

次にですね、「会社人間と良き人生」とちょっと大きな言葉なんですけど、その関係について考えてみたいと思います。それで生き甲斐論になるとこれ難しくてですね、生き甲斐論を専攻にしている先生からお話を聞いても、よく概念の整理が出来てない状況だという話がありましたので、ちょっと他の人の権威に頼る形なんですけど、考え方の整理として非常に役立つものが、シャピロさんの本にですね生き甲斐って言うから分かりにくいんであって、逆に恐れからその反対を考えればいいんじゃないかなという逆転の発想をしている人がいらっしやましてですね。人生に4つの恐れがあるんだと、ここに挙げましたように「無意味な人生を送っちゃうんじゃないか」、或いは「これまでの人生無意味だったんじゃないか」ということが恐ろしい。或いは、「孤独が恐ろしい」という風な感じであってですね。このシャピロさんは、それを乗り越える方法も示唆をいただいています。それが、無意味な人生を送る恐れに対しては、充実した仕事があればその恐怖は無くなるのだと。孤独への恐れは、これは端的ですけども愛する人と共にいるとそれは無くなるのだということですね。それで3番目が「根無し草になる恐れ」、これが地域との係わりの大きい点だと思うんですが、「帰る場所」これは物理的なものだけではなくて「心」、心理的に帰る場所があるんでしょうかということですね。この辺が非常に大事です、という話です。

で、例えば1番目ですね、若干見てみたいと思うんです。会社人間の方々は、1番目の無意味な人生を送る恐れに対してちゃんとした仕事を持っていたんでしょうか、仕事をちゃんと充実させていたんでしょうかということなんですけど、これは個別な問題ですから「そうだ」と言い切れる人も結構いらっしやるはずなんですけど、ただ全般的に見ると実は、仕事人間だったのか会社人間だったのかという区分がございます。で、自分の仕事に誇りを持ってやり甲斐を感じていたのか、仕事が転々と移動させられて仕事は間はないようにと教育されて、会社という枠組みの中で安心を求めているのかという大きな分かれ道になりますので、もしかしたら多くの方々は実は仕事と関係はあまりなくてですね、会社とのみ関係していた可能性があるんですね。その場合には、1番は満たされてなかったとならざるを得ないということです。

それから2番目、愛する人。離婚してない人は、愛する人がいるはずなんですけどね、まあ未婚の方は除くとしてですね。ところがですね、私が知っている会社人間の方は、だいたい自慢げに言っていたのは「家は実質的に母子家庭のようなものですから」なんて言っているんですけど、要するに自分は家庭には係わりは無いということをおっしやる方もいらっしやって、もしそういう方がいらっしやったらこの2番目も満たされていない可能性があるということです。実際そのことを示唆するアンケートが色々出ておまして、これはおもしろおかしく言われているのでご承知かと思いますが、『定年後一緒に旅行に行きたい相手は』と聞くと、『夫は妻と言ひ、妻は友達と言ふ。』ということですよ。で、これもさっき出したサラリーマンのアンケート調査、日経のアンケート調査

です、『60歳を過ぎてから家庭や夫婦で過ごす時間を大切にしたいかどうか』、したいと答えた夫は、54%半数を超えておりますが、妻は39%ということで、やっぱり思いは、ベクトルの方向はかなりずれているということがありますので、2番怪しいんじゃないかということですね。

それから3番目はですね、団塊の世代は実は、これは県によって異なりますが、埼玉県は特にこれ一番じゃなかったかな全国で、団塊の世代が移住でここに定着したという比率が特に高いんだと思うんですね。これ神奈川県の場合の一つ前の世代が一番高いらしいんですが、埼玉県は特に団塊の世代の移住比率が高いということなので、元々の故郷を別に持っていて、それでここで終の棲家とするかどうかということ自分を問いかけなければいけない人たちが一番多いんだと、いう風に言ってもいいかと思います。そうするとですね、忙しい会社人間ですから、住むというときに家を造るとかではなくてですね、既に商品化されていた家をパッと買っていたという風な、マンションをパッと買ったとかですね、そういうことをした方がいらっしゃるのではなかろうかと。そうしたときに、そのマンション



の中で、マンションが悪いと言っているわけではないのですが、自分なりのコミュニティというものを作っていたのか、人間関係を作っていたのかどうかということですが。作ってないと言ってくれないとちょっと話は続かないんですけども、そういう風な方が多いのではないのかということで、今日のテーマはこの3番に係わることになります。

4番に関しては、ちょっと宗教係った話になります

ので、省略をさせていただきたいと思います。

それで、冒頭に挙げました同じアンケート調査の結果ですが、不安だというのは分かったんですが、何に不安なんですかという内容別の分類ですね、そうするとこういう結果が出ました。一つ目は、『肩書きがなくなり寂しい』、というのが団塊の世代の方多いという、皆大体の世代多いんですけどね。ということで、これは何を意味するかというと、会社自体が居場所であった、コミュニティであった、帰る場所であった。そこから

外される、そこに行きさえすれば上司はいるかもしれないけど部下もいてという、はまるところがあったわけですね。その安心感が無くなるのが寂しいという風に解釈できないでしょうか。

それから2番目、これは先程の裏返し、家にいても居場所がない。これが実は夜の残業を支えてきたところがあってですね、奥さんのことをママと呼ばずに、別のところにママと呼ぶ人がいらっしやるというのが。まあ、私もそうしたい思ってるんですけども近々。いっぱいいらっしやったと思いますから、これもそのことを表している。

それから、最後は直接的ですけども、地域社会に溶け込んでよいか分からないと。どうやって溶け込んでよいか分からないという風なことで不安になって、しかもこれが大きな不安であるというのが、ここに出ているわけです。

で、これをですね、初歩の理屈っぽい話なんですけど、有名なマズローの欲求段階説を借りてくると、この上から2番目と3番目に係わる場所ですね。社会的欲求というのは、帰属をする場所が欲しいという欲求と言い換えることができますし、自我欲求というのは自分の在り方を他人から認めて欲しいという欲求だということですね。で、会社人間のこれまでの行動をこの表で総括するとすれば、この二つを全て会社に求めてきたんだということ。おそらく上もそうなんでしょうけど。ところが、会社は引退をします、させられます。さあ、どうしましょうかということで、これまで地域においてこれを求めてこなかったしっぺ返しを、これから受けるかもしれないよという瀬戸際にあるのではないかと思うわけです。ただ、この欲求を持つこと自体は、人間として非常に自然なことです。しかもこれは必要不可欠のものでありますということで、私が申し上げたいのは、コミュニティへのデビュー、地域へのデビューというのが、その人の生き甲斐にとって必然的なものであるし、必要不可欠なものであるのではないかという認識でございます。

で、この話しに行く前ですけども、実は諸々のアンケートでは、定年後どうしたらいいですかと団塊の世代の方に聞きますと、大体の人は働きたいということですね、日経新聞の調査でも7割は働きたいということになっております。で、実際に今好景気ですし、技能伝承の問題もあって人手不足感が強いものですから、働きたいという人の技能を持っている人はですけども、その希望を叶えられる確率がかなり高いものがあるんだらうという風に思うわけです。ところが、会社への帰属というのはいつかは終わりが来るということを、ちょっと再確認をしておきたいんですね。何故かと言うと、会社がコミュニティ性を、共同体のような雰囲気、或いはもうちょっと言えば大家族のような雰囲気を持っていたというのは、日本の企業はアメリカの企業よりもその点が強かったという風には言われているんですが。基本的に会社というのは利益集団、ゲゼルシャフトですから、貢献できない人間は居ることは出来ないわけですね。貢献しつつ家族的なそういう人間関係も保つことができたということでありまして、いつかはその利益集団との係わりには終わりが来るということをやはり再認識しないといけないのではな

いかということでございます。

よって、人によっては60、人によっては70かもしれませんが、あるタイミングで地域にデビューすることが絶対必要になるんだろうと思うわけですね。ところが会社人間ですから、これまでに地域との縁を必ずしも大事にしていなかったということなので、多少キャッチフレーズ的に言うとは、地域に戻ることは出来ないんですね。居たわけじゃない、関係を作ったとしたら退職後戻ることが出来るわけですけども、戻る地域はないので、これから作るしかないということ、参加するしかないってことですね。ですので、改めて参加するときには、どういった発想が必要かということ、ちょっと企業っぽいことを持って来てですね、自分自身を地域にマーケティングする心構えが必要じゃないかと申し上げたいわけでございます。そのときに、マーケティングと言ったって色々理論はございますが、一つだけ概念を持ってきまして、SWOT分析というのがございまして、これ簡単に端折って説明させていただくと、企業がある商品がある市場に売りたいときに、どんな分析をしたら良いかということ、簡単に説明したものなんですけど、SWOTというのは頭文字です。Sは、Strength。自分の企業が持っている強みは何か、分析しましょうよ。弱みは何かということも、当然分析しなければいけません。それともう一つは、市場の側にどんな機会があるんだということ、これは4はあまり関係はないんですけどね、これは競合関係、どんな脅威があるか、或いは機会を失うかということ、自分と相手の両面を分析しましょうということ、キャッチフレーズ的にまとめたのがSWOT分析という言葉でございます。

で、ここで関心を持っていただきたいのが3番目のOpportunityですね。自分を地域に売り込む、自分を商品だとして地域に売り込むとしたらどういう考えが出来るんだろうかということなんですけど、どんな機会があるんだろうかということなんですけど、これをですね、今日は地域の問題という風に読み替えていただきたいと思っております。機会ではなくて、むしろ問題だという風に読み替えていただきたい。それと1番目ですね、弱みは見せなくていいと思うんで取り敢えずは、自分の培ってきた強みというのは、一体何だろうかという認識は必要かと思っております。で、何でそのOpportunityなのに、問題を取り上げるんだということなんですけど、この地域の問題から入る意味というのを少し理論的に整理をしておきたいと思っておりますが、コミュニティって言うときにそれは一体何なんだということをお話をさせていただきますと。これはクルパットさんという都市社会学者の整理ですけども、一つ目は物理的側面がありますよと。ごめんなさい、これはレジュメの方には書いてないんですが。近隣のエリアですね、市町村の区分、或いはもっと広域エリア。ヨーロッパなんかでは、ヨーロッパ連合自身がコミュニティって呼んでますから、そこまで広まる事が出来るんですけど、いずれにしろ物理的な境界があるような領域のことを指すと伴に心理的な側面、利害とか価値とか技術などを共有する。因みに、技術は今回は今日は関係はありません。これはどっちかということ、会計士のコミュニティという感じですね、専門家集団のことを指してるので、利害か価値観を共有

すること。それから、共有した結果何が起るかという、ここにですね社交関係が起ったり、援助が成されるようになったり、それからさっきコミットメントという言葉を出しましたけれども、愛着心を抱いたりするという風な心理的側面があるということですね。

で、この1番目の物理的側面というのは、移住してきても或いは2～3年後にまた出て行くにしろ、そこに居るだけでコミュニティのメンバーですから、別にそれ以上の意味はございません。大事なのは2番目でございます、この2が無い限り先程の根無し草の恐怖というのは消えないだろうなということは、もう一目瞭然と理解いただけるのではないかなと思います。それからこの2番目の心理的側面のコミュニティ、心理的なコミュニティはどうやったら生まれるかということなんですが、町内会の研究をずっとやられている玉野という先生のまとめなんですが、これは生活の実感で分かる常識的なことでございますけれども。一つ目は生活協力機能ということで、端的には昔よく醤油の貸し借りと言われていたようなお互い様、助け合いのそんな関係が一つの機能であるということです。もう一つは、話はもう少し大きくなりまして、共同防衛ですね。防犯・防火、そういった町全体に対する何かの脅威から共同防衛しようということですね。こういう機能がありますと。元々、町内会というのはですね、伝染病から住民を守るために出来たという経緯がございます、それにプラスして関東大震災のときに住民救済という機能が高まってですね、それで町内会が生まれたといういきさつがあって、こういうことになっております。

ところがですね、これはもうご承知のとおりですけれども、この生活協力機能が今あるのかということなんですが、我々高度成長期を経て豊かになりましたし、市場がグローバル化して安いものがいくらでも手に入ります。99円ショップも流行っておりますね。ということで、エンゲル係数もどんどん下がり、醤油は借りなくていいですよ。お金が無かったら、99円ショップに行けば何とかなるといふ事態になっております。それから、一方では行政サービスも充実してまいりまして、隣に助けられなくてもごみは行政に頼めば何とかなると。或いは、これは行政は困るんでしょうけども、いざごみもですね行政に頼めば何とかなるといふことでですね、頼りがいがある行政が生まれたということでもってして、生活協力機能というのがどんどん衰退していると言っても過言ではないということですね。

で、もう一つの、2番目についてもかなり同様なところがございます。例えば、治安に関して言うと、我が家はセコムに加入しているから問題ないという風にして、商品として治安を買うことが出来るような時代になってきております。ところがですね、あくまでもこれは個人単位でありまして、或いは家単位のものでありまして、道路を歩いているときの治安は実はまだ買い切れないんですね。買い切れないってちゃんと言わない理由はですね、Gated City というのがアメリカには在りまして、まちぐるみでですね壁で囲んじゃって、悪い者が入らないようにして、入り口1箇所にして、そこにガード

マンを置いて、雇って、共同でという風にして、道路も治安を確保するという動きが出ております、既に。それをじゃあ共同防衛機能を金で買ったのではないと言われてたら、そのとおりになるんですね。ただ、それはエリアが非常に限定されてますから、子供が自由に遊びに行くところの道路の治安は買えないんですね。という風に考えると、2番目の共同防衛機能というのは、商品市場から買い切れないところがあると言わざるを得ないので、これはまだまだ残るであろうという予測がつくわけです。で、ここには機能と書いてあるんですが、この機能を人々が求めるときにコミュニティというのは生成される可能性が高まるという意味で、コミュニティ生成の契機がイコールこの二つの機能だという風にさせていただいております。これを考えると、地域の問題から入るということはすなわち、この共同防衛すべき何かを探せということと同じなんですね。今皆さんが住まわってる地域で何か問題は無いのかと、いう風に考えること自体が共同防衛機能を高めようという契機になるということですね。それと同時に、自分がその問題解決に何か資することが出来るという風なことを思い付くようであれば、そのメンバーシップを獲得する契機にもなるという二つの意味があって、この地域の問題を考えるということを主張しているわけでございます。

それで実際にどんなものがあるかということなんですが、これはお手元の資料にあったかと思うのですが、基本的にですね地域の問題は地域でないと分からないので、私は人間に住んでおりませんので申し訳ないんですがよく分かりませんので、全国共通の問題からしか言い得ることができません。例えば、少年育成の問題は全国共通だと思います。学級崩壊だということであるとか、或いは青少年の路上のマナーですとか、色々なことがございます。それから、商店街の没落が問題だと思ってもいいですし、孤独な老人が増えたといってもいいかもしれません。遠距離介護という問題も多分ありますし、子育てに困っているワーキング・マザーが増えているというのもございます。その中で今日は、風景というものを一つの例として、取り上げたいという風に考えておるわけです。なぜ風景を取ったかという、後で述べさせていただきますように団塊の世代が持っているパワー、リソースというのがですね、3つほど挙げられるんですが、そのうち2つぐらいが適用できるからです。

それで一般的な話を申し上げますと、高度成長期に日本の風景というのがかなり激変したという風に言うことができるかと思います。これは環境保護者の言葉を借りてのことなんですが、川はコンクリの堤防になりましたと、海岸は護岸だらけですと、谷はダムになりました、山は何とかタウンになりましたということですね。この辺は、宮崎駿さんが批判してるところでございますけれども。それだけではございませんで、例えば建物ですね、我々の住宅そのものが新建材だらけになっているということにして、街は電線だらけで、且つその統一性があればまだいいんですけれども、純和風の家隣にですね、家は南欧風で行くと、バレンシア風で行くとかですね、そういうのがいっぱいありまして、私が通う大妻女子大学のキャンパスが茶畑の真ん中にあるんですけれども、

最近家が増えはじめましてですね、茶畑に合うのかなという家が増えてですね、私は一人ちょっと不満に思っているんですが。周囲の人に言わせると、大妻女子大学のキャンパス自体が、茶畑を汚していると言われちゃったらもうおしまいなんですよね。

私は実は、三重県の伊賀市の出身で、町家の保存率が全国で1・2を競うくらい高いんですが、高齢化で後継ぎがいなくてどんどん駐車場になっていっているという事態がございまして、一応それでもお城の天守閣に登ると瓦屋根がずっと続いて綺麗なんです。私が学生時代にですね何を好き好んでか知らないけれども、たったの4階建てなのにラフォーレというビルが建ちましてですね、もちろんラフォーレ原宿のことを意識してんだと思うんですけども、がっくり来ます。私、東京だったので、たったの4階でラフォーレと言うなということと、4階建てでも町家の景観を壊すには十分なんです。そういうことを平気でやってしまうと、私が田舎に残っている同僚に言うんですけど、お前は東京の人間だからそんなこと言うだけども、我々はずっと田舎に住んでいるんだから田舎にもラフォーレ欲しいんだと、いう風に言われてしまうと反論が出来ないということがございました。

で、ちょっと昨日大妻女子大学、私の主たる勤務地は千代田区の三番町でございしますが、その辺ちょっと歩いて風景の汚らしいのを撮ってきました。4枚だけお見せしますので、これあまり行きつけでないんですけど、行きつけたいなと思っている、何か小粋な小料理屋さんで感じがしますでしょ。ところが、ちょっと引くところなんです。夜行くと見えないもんですから小粋なんですけど、昼行くともうげんなりするというような状況でございまして。それから、靖国神社が歩いて3分くらいなんで、1年に1回くらいしか行きませんが、昨日は行ってまいりまして、ちょうど梅の花が咲いて良い感じなんです。東屋から見た庭園、なかなかでしょ。ところがこの東屋を右の方へ出てください。某大学のボナソードタワーというものが、すぐ後ろに建っております。左の方に見えないんですが滝があるんですけど、おまけが付いてまして、建設中のクレーンが滝の延長のように続いてですね、どこから滝が落ちているのか分からないような状況もございまして。

そんな感じで、実は街並みは綺麗とか汚いとかという美的な基準というのはこれはかなり主観的なもので、誰が決めるわけにはいきません。けれども、総じて日本の街並みや景観というのは、よくないと思う意見があるんだということですね。それではこの、風景が悪くなった背景には何があったんだと、これ整理しないといけないんです。実は、授業中にこれをやってまして色々と言いたいことがございまして。今日は1個だけ言葉を持って帰っていただきたいと思うんですが、これは図では出ません、言葉で申し上げます。コンセプト風景というものです。これは、お配りした資料に有ったかもしれませんが。これは何かと言うと、自然の物では無くて、人間がコンセプトで改変したような風景だということです。概念によって意味づけられた空間と言ってもいいし、何かの特定の目的のためだけに作り出された空間と言ってもいいと。

例えば公園がそうです。すみません、行政の方がいっぱいいらっしゃる中で申し訳ないんですけども、私の意見ではありませんので、借りているだけということで、ご勘弁を。どういうことかということですね、視覚的な緑地か、避難所か、安全な遊びが出来る場所という概念で造るということですね。これはどういうことかと言うと、何かが抜けているんですね、それは聴覚的とか、触覚的な部分が抜けてるっていうんですね。例えば、緑が多くても雑草は抜き取られるのが常であると、芝生になってますよね。よく手入れされたということがもう一つのキーワードかもしれませんが、そうすると虫は大体秋には鳴かないとかですね、薬剤で殺されて居ないとかですね、匂いもしないということですね、公園は公園なんですけれども、自然ではないよねという話になるわけです。或いは、遊具ですね、これは怪我して死んだりすると、行政も大変に非難されますからしょうがないんだと思うんですけども、危なくない遊具がある場所という風になっていますよね。で、子供たち自身がほんとにそこで遊びたいのかどうかというのが、よく分からないところが実際ございます。

それから川の治水工事、本来の日本の川というのはウネウネとくねっているものでして、且つ水害に対してはなるべく川の上流で貯水池で溜め込んでおいて、これを防ごうとしていたというんですが。高度成長期から一気にですね、これは水を流し去ったほうが良いと。貯めるのではなくて、川はなるべく直線にして、護岸をして、雨が降ったらすぐさま海に流れて行っていただくような通路にした方が良いというコンセプトで造られたのではないかと。このコンセプト風景を提案されている方は言っています。

さらに商業的なコンセプト、これはもう言うまでもないんですが、マクドナルドの黄色と赤とかですね、ああ



いうのが街道沿いにいっぱい出てきていると。これは完全に買い気をそそるためなんです、心理学的に赤と黄色がふらっと入るんですね。マクドナルドもちゃんとアンケートを取ってまして、何パーセントの人が来る気も無いのに来たかというのをちゃんと統計を取っています。そうするとですね、赤と黄色が良いらしい

んですよね。私、昔二十歳のときに浜松町で紫色の提灯を付けた居酒屋さんが在ったんですが、どう思いますか。1回も入る気がしなかったんですけど、それなりに流行ってたんですけどね。不思議な方が入ったんでしょうね、そんな感じです。

ということで、これは風景が劣化した一つの考え方、背景にある考え方なんですが、簡単にまとめさせていただくと、横のつながりですね、周囲との関係性、まちの全体性とかをまったく考えない。或いは、過去との関係性も考えないということですね。そういうつながりを全て切ってしまったもので建物とか物財を作ってきたことが、景観が我々に豊かさをもたらさないような所以になっているのではないかとということです。

それでは、問題の方の事例は終わりました、今度は団塊の世代が持つリソースですね、強みはどういうことがあるか。これもやはり地域の問題と一緒に、各自が考えるしかありませんので、キャリア教育が言うように自分の棚卸というのをやっていただく他は、基本的にはありませんが、世代に共通するような強みもあるだろうと、他の世代については言えないけれども、団塊の世代はそれは分かりやすいので、今日3つに整理してお話をさせていただくと、これがあるんじゃないですか。

一つ目は、先程もありましたけれども、集団生活の経験者であるということですね。1947年から49年の3年間だけなんですけど、非常に多くの子供たちが生まれて、800万人以上が生まれました結果、例えば大阪に日本一の小学校があったんですが、私の子供が行っている小学校は今2クラスしかありませんが、かつての日本一のクラスは1学年17クラスあったということですね。校庭はもう満杯になってたという、冊子なんかで見ることが出来ます。もちろん想像ですけども、プールはイモ洗い状態だったと思いますしね。その後、受験戦争もすごかっただろうと。ということで、どこへ行っても集団が付きまとった世代であるということで、ここからですね協調と競争というですね、一見正反対の能力が鍛えられているはずであるということですね。且つ、物が無い時代に生まれておりますから、新しい物を自分で創作するということであるとか、集団遊びが得意だったろうということが推測されます。そこから、子供の外遊びの支援というあたりにこのパワー使えると思うので、今日はまだあまり関係が無いのでこの辺で終わりにして。

次は、数が多いこと自体ですね、何か共通して行動を取れば必ず世の中がそちらに目を向けると、世の中自体が変わるということですね。それからもう一つ、今日風景に関してはこれが一番効いてくるんだと思うんですが、高度成長期前の生活を体験していらっしゃるということです。戦後の貧しい状態から、高度成長の一番良いときまでを、小中高の間に体験していらっしゃるわけですね。『三丁目の夕日』というような映画がありましたけれども、あれを地で体験をされているということです。且つですね、これは大事だと思うんですが、最初を知っているだけではなくて、途中変わっていく順番とかプロセスまで体験をしていらっしゃるということですね。それ以前だけとか、それ以後だけじゃない、途中の変わり目をご存知だということです。それでですね、風景問題を解決するために、このパワーを使えるのではないかとということを申し上げたいのですが、一例として農村風景を知っていらっしゃる方が多いということで、農村風景今もありま

すけどね農村に行けば、でも風景は変わってるんですよ。その一つは、電線が無いとかですね、昔は蒸気機関車が走っていたとか、そんなことではなくてですね。例えば、私の田舎は蓮華畑だったんですよ、休耕の時には。ところが今は、蓮華を見たことが無いんですね。それもそのはず、統計を見てみるとですね、蓮華畑の最盛期は1930年代でですね、ちょっと持ち直したのが1960年代でして、後は衰退の一途で、全国的に無くなっているというのが分かりますね。この丸をつけた辺りに、団塊の世代が生きていらっしやったということをごさいます。

それから、均一的木造しかないわけですから、昔の建材は。均一的にならざるを得ないわけですが、美しい街並みというものを記憶になっているんだと思います。その他、ちょっと懐かしいっぽいのを申し上げますと、道路は舗装されてなかったですよ。雨の日なんか、昔の古銭なんか出てきたりして、楽しかったと思いますけれども。打ち水の習慣があったりとかですね。お魚はトレイに乗って売ってなかったですよ。量り売りの飴屋さんとか。それから、車がほとんど走ってなくてですね。車が出す排ガスの匂いが大好きで私なんか、後ろついて行っちゃいましたけれども。そういう時代もございました。それから、あとは何でしょうね。蚊帳ですとか。正月というのは、三が日どこも開いていないのが当然だったのに、今はもういつ正月かが分からないくらい店が通常に開いているということです。そんな感じで、昔の風景を覚えていらっしやるということなんですが、ここでちょっと強調しておきたいのは、このパワーをすぐに活かしていただきたいという風に私自身思っております。なぜかと言うとですね、さっきのコンセプト風景というのを思い出していただきたいのですが、今の子供たちはコンセプト風景の中で生まれたんですよ。ということは、自分の原風景は何だって言われたときに、団塊の世代は昔懐かしいところを思い浮かべられるんですが、今の子供たちはもしかしたらマンションの中であり、電柱の下であり、高架の下かもしれませんね。

で、ちょっとあやふやな記憶なんですけど、面白いアンケートを見たことがあってですね、どういう場所で落ち着くかっていうときに、田舎の風景を見せたときに、今の小学生中学生は落ち着かないと。じゃどこだって言うと、高架下で自転車がうち捨ててあるような写真を見たときに、これは落ち着くっていったアンケート調査もあったんですよ。それで良いのかってことです。このまま団塊の世代の方が何もしないで、ずっとあの世まで行ってしまおうとですね、今のコンセプト風景こそが原風景として次世代に引き継がれてしまうということ。これは私自身は団塊の世代ではありませんけれども、たまたま田舎生まれだったので、20年遅れぐらいの日本を知ってますから、共有できる部分なんですけど、危機を感じております。

それですので、共感いただける方はですね、まずどういう行動をしたら良いかということなんですけど。一つ目は、もし自宅をお持ちであれば、自宅から始めていただきたいなということですね。近所のことは勝手にコントロールは出来ませんから、自宅は如何様にも変更出来ますから。もし建売で買われた方は、周囲の風景をよく見回してみ

ですね、合わないところがあったら変えていただくという風なことを出来るのではないかと。そうするとですね、先程の団塊の世代のパワーの2番目ですね、マスとしての社会的影響力というのがありますから、一人ひとりが少しずつやるだけで、それがトレンドになるわけですよ。今ちょっとした和ブームというのが起っておりますけれども、同じようなことがどこでも団塊の世代の人が動けば起こせると私は思っております。それくらいの力を持っているということをご自覚をいただきたいという風に考えます。

それから、集団活動ということであれば、既に色々ですね日本の美しい風景を守る会ですとか、それぞれのまちの街並み保存運動とか色々ありますから、ああいうところ覗いて見られるのも良いかと思えます。個人個人で持てる力で考えていただければいいかなと思えます。

それで、この項のまとめですけれども、風景で言うところですね、近所の風景を今日帰ったら見回していただきたいと思えます。その時にですね、醜いなって感じたらですね、それが共同防衛意識の始まりだということですね。コミュニティ形成の契機だということです。それから、もしかして自分の持てるものが何か、そのことの改善に資することが出来ないのではないかって考え付いたとしたら、それがご自身がコミュニティに参加することの契機になるということです。こういうことがあればですね、



地域に色々問題がございますけれども、それを分析することでご自身が地域デビューしやすくなるという風に言えるのではないのでしょうか。

で、今日はそのことを包括的にご理解いただくために、別に覚えなくても良いんですけども、マーケティングの概念である SWOT 分析というのをお持ちいたしました。

40分になりましたけれども、パパッと山の学校の写真だけ見ていただきまして。

瑞牆山（みずがきやま）というところがあります。日本100名山の一つらしいんですけども、なかなかの景観でございます。実はこれもですね、景観問題がありまして、これ良いところだけを撮っておりますが、もうちょっと引いて撮るとですね、新潟県の柏崎原発から東京都民に電力を供給するための高架鉄線がズーンとこの山を横切っているのをごさいますね、わざわざこれを避けた写真でございます。で、その麓、一部見えますね、鉄線が見えるかと思えますが。この宿で座学もやりますが、これは企業の中堅社員の方の研修ということで来ていただいておりますけれども、感性を鍛えるというワークショップを主にやっております。

これなんかは自分の感じる心の風景を絵に描いてみようという風なワークショップですね。絵に描いていただいて、それは実はあなたの今の状態ですよなんて言ってですね、そのことをどう分析しますかと。もう子供ではありませんから、自己分析をさせていただきます。そうするとなかなかですね今の心理を、自分で分からなかったけれどもそう思ったんだという、自己納得をすることが結構多いんですね。例えば、不祥事を最近起こした大企業の方がたまたまいらっしゃってですね、絵を描いて、何でもかような絵を描いたと思うかってどんどん聞いていくとですね、いやちょっと不祥事とか何とか言い始めてですね、それが表れてたということを確認したこともございます。

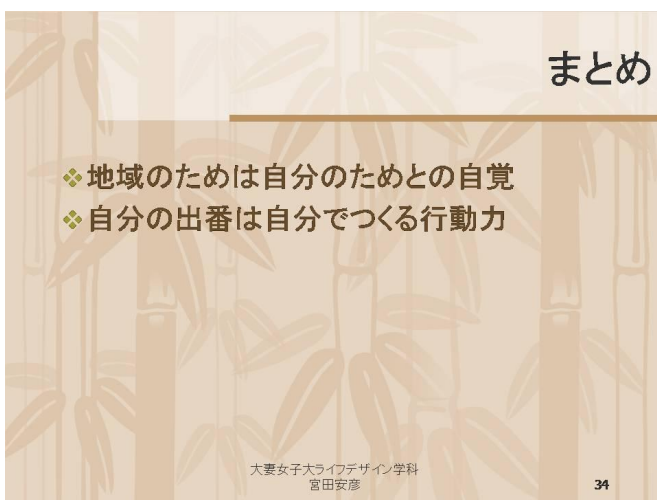
それから、そういうことばかりではなくて、開墾をやらされるんですねいきなり。何のためって、それはちょっと後で言うから聞かないでやってみろって言ってやっていただいてですね、農作業を体験して、しかしやった後はですね、必ずやってよかったという風な感想が返ってまいります。これもさっきとちょっと似てるんですけども、団塊の世代の方っていうのはそういう体験が無いわけじゃないんですね。昔有った、鍛えられた感性の一端を取り戻すということが出来ると。で、そういうことをしたいというのが、この山の学校でございます。これも今の小学生を呼んできたなら、初めてやることですから、なんか面白かったというそういう感想になるかと思うんですけどもね。ですから、趣旨がまったく違います。

あとは、ゲストスピーカーをお呼びしてですね、この岡本敏子さん亡くなっちゃったんですけども、岡本太郎が乗り移ったようなエネルギーが振り撒いていただくような方ですね、何の話でもいいんですけども、居てとにかく口を開けていただくだけでみんな元気になるという素晴らしい人でした。そんな感じで、学校をやっております。

最後まとめになりますけども、このことだけお話をさせていただきます。

キーワードで申し上げます。冒頭に申し上げたように自分の老後の楽しみを求めるという気持ちは、これは自然なものでございます。しかしながら、地域を自分のために使おうと思ったら、或いは地域で自分が楽しもうと思ったら、まず自分を地域のために使うことが

必要ではないだろうかということですね。そうして初めてどちらもハッピーな関係になれるということはお話しをしたつもりでございます。したがって、楽しい老後を送るためにはどうしたらいいかという問いかけは、自分が社会のために、地域のために出来る



ことは何なのかという問い掛けとほとんど同じにならざるを得ないということでございます。ですので、マネープランとか旅行の計画も結構なんですけど、自分と自分の家庭の最適化を求めるようなことばかりを考えていては、いけないのではないかなと、そのことを一言で表すと「情けは人のためならず」ですね。地域のために何かやるということは、巡り巡って自分のためになるんだということを理解すれば、奉仕だとか犠牲だとか、そういうことではなしに、地域に自分を参加させる契機に、自分自身のモチベーションになるのではないかという風に考えるしだいでございます。

5分超過しましたが、以上で私のお話を終わらせていただきます。  
ご静聴ありがとうございました。

## ■事例発表

1. 小澤 盛久さん 【NPO法人加治丘陵山林管理グループ】
2. 皆さん 【入間市文化創造ネットワーク】
3. 鳥村 征弘さん【NPO法人子育て支援センターあいくる】
4. 木原 猷和さん【少年野球チーム グリーン・インパルス】
5. 師岡 英男さん【金子おやじの会】

事例発表は5名で行われた。

### (1) 加治丘陵山林管理グループの小沢盛久さん

加治丘陵に関わるようになった経緯を説明して、現在の山林管理の内容を紹介した。現在会員数は250名、賛助会員が50名。主な活動として、鳥類や小動物・数々の動植物の保護、ハイキングコースの整備、遊歩道の建設や整備、雑木の間伐・下草刈、防災予防活動として山林内の火の用心プレート設置、しいたけ栽培の取り組みなどを行っている。



### (2) 入間市文化創造ネットワークの皆さん

FM収録風景を模擬した団体の紹介を行った。ゲストは67才の清水さんでサラリーマンを退職してから新しく地域活動として子供達とかまど作りそして火起こしを始めたのが切っ掛けとなってアミーゴでの活動に参加することになったとインタビューに答えていた。退職したら自分をリセット、がキーワード。



### (3) 子育て支援センターの鳥村征弘さん

企業で培ったものを更にプラスして地域に還元したいと思っていたところ、2年前にNPO法人あいくと出合った。毎月の子供への読み聞かせを通して、子育て活動の面白さを発見。一方、読み聞かせを通じて自分自身が学ぶことも多くある。「人は人によって人になる」ということを実感。



(4) 少年野球チームの木原さん

30年前にグリーンヒルに引っ越してきて奥さんの勧めで団地内の少年野球チームを見ることになった。少年野球を通じて地域とつながりが出来てきた。1999年に退職後、地区の役員や評議委員、入間市少年野球連盟の副会長などを経験して色々な地域活動に接するようになった。全ては奥さんが地域に誘ってくれたお陰だ。



(5) 金子おやじの会の師岡英男さん

11年前の公民館のおやじ講座が発端で、メンバが集まるようになった。会員の目標は様々なので親睦と地域の交流を深めることを第一に考えた。数回の行事を行う中で、蕎麦打ちやIT講習などの軸ができた。生涯学習フェスティバルへも参加するようになり、地域の貢献も担うようになってきた。



■アピールタイム

1. 【NPO法人EMネット埼玉 入間市ごみに花を咲かせる会】 上山 巧さん
2. 【入間市社会福祉協議会・入間ボランティアセンター】 村上紀博さん 池田容子さん
3. 【NPO法人子育て支援センターあいくる】 亀谷 容子さん
4. 【いるま塾の会】 岩崎 廣司さん
5. 【おしゃべりスタジオほっとホッ】 杉山 若江さん
6. 【NPO法人加治丘陵山林管理グループ】 山西 素直さん
7. 【(社) 入間青年会議所】 長谷川 渉さん
8. 【まちづくりサポートネット元気な入間】 渡部 直也さん
9. 【入間市文化創造ネットワーク】 川田 弘之さん

【NPO法人EMネット埼玉  
入間市ごみに花を咲かせる会】 上山 巧さん



【入間市社会福祉協議会・入間ボランティアセンター】  
紀博さん 池田容子さん



【NPO法人子育て支援センターあいくる】  
亀谷 容子さん



【いるま塾の会】 岩崎 廣司さん



【おしゃべりスタジオほっとホッ】  
杉山 若江さん



【NPO法人加治丘陵山林管理グループ】  
山西 素直さん



【(社) 入間青年会議所】長谷川 渉さん



【まちづくりサポートネット元気な入間】  
渡部 直也さん



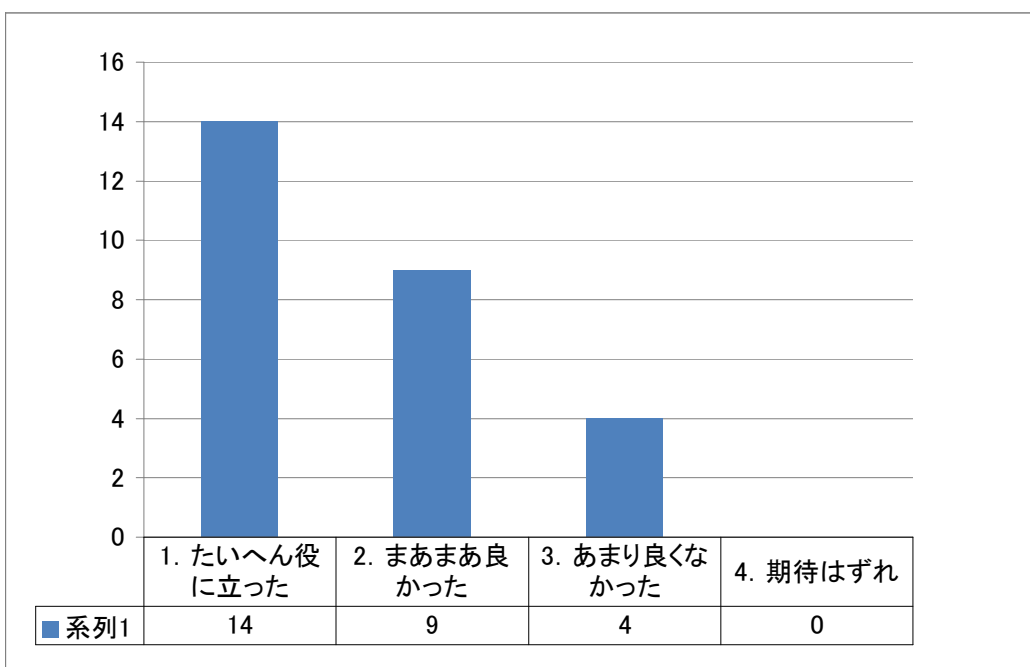
【入間市文化創造ネットワーク】  
川田 弘之さん



## 「でばんだ！お父さんフォーラム2007」アンケート集計結果

Q1 今日のフォーラムについてお伺いします。1つだけお選びください。

1. たいへん役に立った	14	50.0%
2. まあまあ良かった	9	32.1%
3. あまり良くなかった	4	14.3%
4. 期待はずれ	0	0.0%
無回答	1	3.6%
	28	100.0%

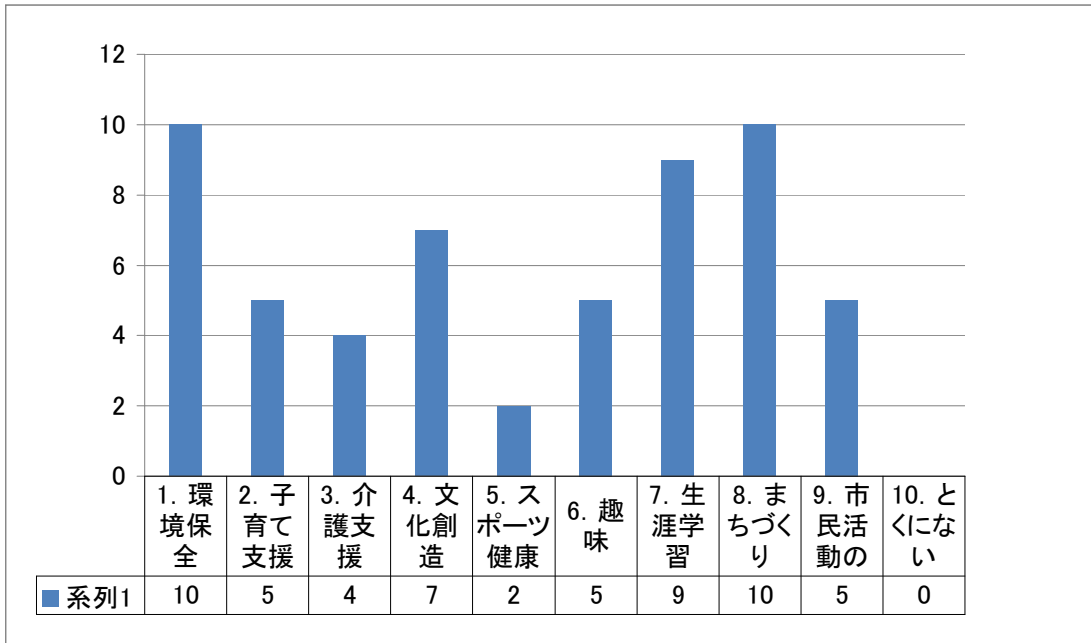


Q2 あなたがまちづくりへの参加やまちに回帰するに当たって知りたい情報は何か。

楽しさから町づくりに参加する。アミーゴの企画に共感しました。宮田先生の「よき人生の要素」、仲間に伝えます。4つ目の目的とは？
市民活動数の数の多さにびっくりしました。これからも個個機会を作って情報を収集して、自分のやりたいことを決めたいと思っています。
心を強くするための団体と活動内容、人生哲学の学びの場
市民活動の参加 資料を頂きました。
自分の回りの情報をなるべく多くその中から選択を考えられる様に「いるま」「市のインターネット」等々
活動団体の常時に問い合わせできるような事務所(連絡所)
自分の思い、企画等を取り上げてくれる場の情報
具体的な活動内容・頻度・活動(参加)時間(週何日位、週何時間位とか)
商店街の活性化に伴う、振興計画等情報

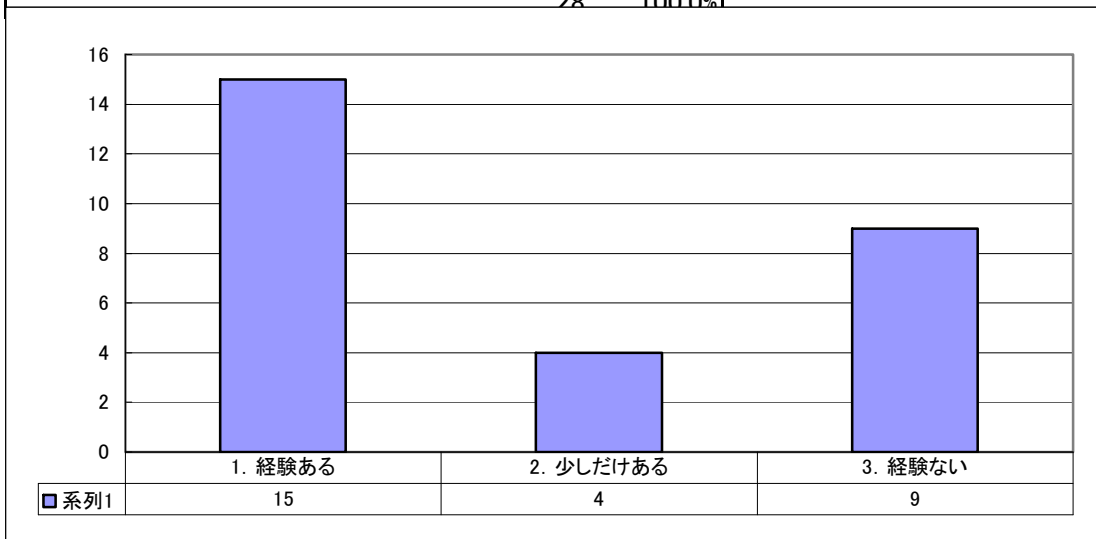
Q3 あなたが興味を持った活動の分野はありますか。3つお選びください。

1. 環境保全	10	35.7%
2. 子育て支援	5	17.9%
3. 介護支援	4	14.3%
4. 文化創造	7	25.0%
5. スポーツ健康	2	7.1%
6. 趣味	5	17.9%
7. 生涯学習	9	32.1%
8. まちづくり	10	35.7%
9. 市民活動の支援	5	17.9%
10. とくにない	0	0.0%
	57	



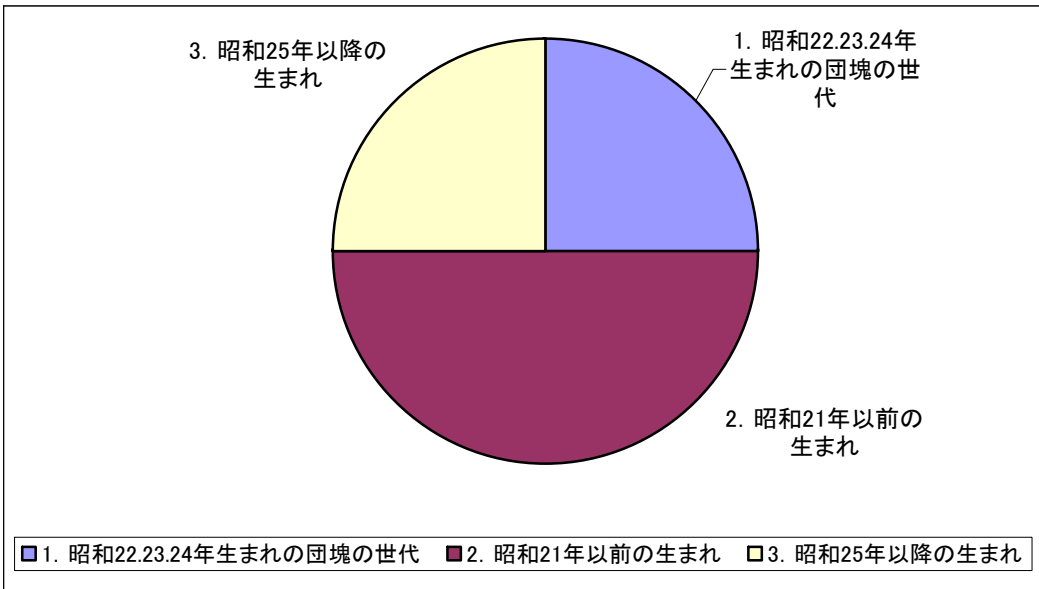
Q4 あなたはこれまで地域活動やNPO活動をやった経験がありますか。1つだけお選びください。

1. 経験ある	15	53.6%
2. 少しだけある	4	14.3%
3. 経験ない	9	32.1%
	28	100.0%



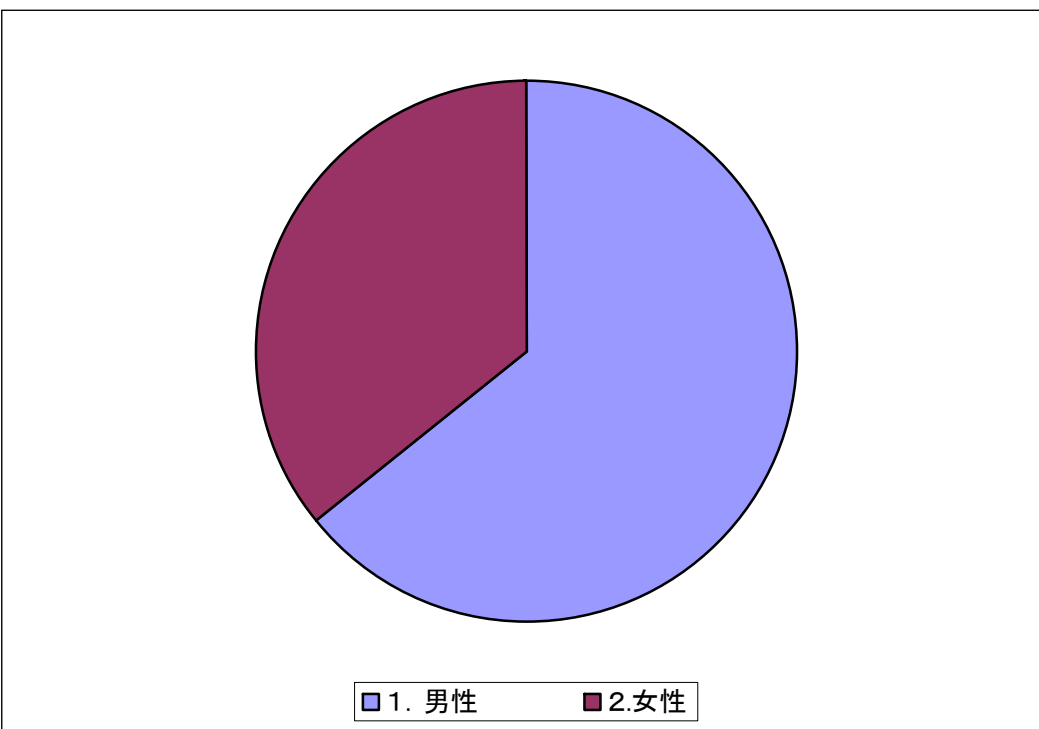
Q5 あなたの年齢についてお伺いします。

1. 昭和22.23.24年生まれの団塊の世代	7	25.0%
2. 昭和21年以前の生まれ	14	50.0%
3. 昭和25年以降の生まれ	7	25.0%
	28	100.0%



Q6 あなたの性別を教えてください。

1. 男性	18	64.3%
2. 女性	10	35.7%
	28	100.0%



Q7ご意見ご感想がございましたらご自由にお書き下さい。

<p>障害者支援活動をして5年になりますが、団塊世代の地域デビューと障害者の地域デビューを一緒に進行させる方法を模索しています。</p>
<p>事例発表では8分間の時間の制限では気の毒の様な気がしました。もっと詳しく聞きたかったと思います。後半のスライドを使ったごみ花はとても素晴らしい活動でした。</p>
<p>この種のフォーラムは入集めかたいへん難しいようです。関係団体のネットワークの強さが集人成功の鍵となっているようです。どう広げてゆくか、つなげていくかが課題だと思います。</p>
<p>今後市民活動に参加したい。</p>
<p>地域に入るための情報を数多く入手出来ました。こんなチャンスを待っていました。</p>
<p>2007年問題がテーマとなっているが、はたしてこの年代の人が何人出席していたのかが気になった。すでに活動している人達が多く、単なる発表会になっていたように思う。もっともっとPR活動が必要では？</p>
<p>有り難うございました。リタイアして10日目です。徐々に気持ちの切り替えを考えていますが、なかなかきっかけが、何かヒントを頂いたような気がします。</p>
<p>活動報告の時間が短い(事例発表)</p>
<p>団体の顔が見えてよかった。一人でもデビューしてくれるといいですね！</p>
<p>①テーマをもととしぼってパネルディスカッション方式でやったらどうか。②1回では無くテーマごとに分けて開催した方がよかったのでは。</p>
<p>ますます元気を頂きました(市長出席もよかったです)</p>
<p>2007問題とらえ、この問題は50年前から分かっていたことであるが、政治は何もせずに、07年に入って行く事になった。年金問題では、相談所に来る人が100万人を超えたため、延長が決まったとのことであるが、この不安を持ちながら、地域社会にかかわるには、どうするかを説明して欲しかった。</p>
<p>こんなにたくさんのグループがあるんだなとびっくりしました。他のソバ打ちなどに参加したい。</p>
<p>躍動の市を感じました。</p>
<p>もっとメリハリある進行であれば良かったと思う。長時間のため少し疲れてしまう。</p>
<p>NPOの立ち上げを希望しておりたいへん参考になり、感謝しております。入間市の市民活動がたいへん活発な状況に驚きました。すばらしい！これも行政のサポートが暖かい事と住民の活力がうまく合致していることと存じます。</p>